天徳の御歌合のとき、兼盛、忠見、ともに御随身にて、左右についてけり。初恋といふ題を給はりて、忠見、名歌よみ出だしたりと思ひて、兼盛もいかでこれほどの歌よむべきとぞ思ひける。

恋すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか

さて、すでに御前にて講じて、判ぜられけるに、兼盛が歌に、

つつめども色に出でにけり
わが恋はものや思ふと人の問ふ
まで

判者ども、名歌なりければ、判じわづらひて、天気をうかがひけるに、帝、忠見が歌をば、両三度御詠ありけり。兼盛が歌をば、多反御詠ありけるとき、天気左にありとて、兼盛勝ちに

けり。

忠見、心憂くおぼえて、心ふさがりて、不食の病つきてけり。頼みなきよし聞きて、兼盛とぶらひければ、「別の病にあらず。御歌合のとき、名歌よみ出だしておぼえ侍りしに、殿の『ものや思ふと人の問ふまで』に、あはと思ひて、あさましくおぼえしより、胸ふさがりて、かく重り侍りぬ。」と、つひにみまかりにけり。

執心こそよしなけれども、道を執するならひ、あはれにこそ。ともに名歌にて、拾遺に入りて侍るにや。